

太神楽師・鏡味仙三さん、仙花さん 拠点を山梨に

山梨日日新聞

トピックス

甲府市出身の太神楽師鏡味仙三さん(38)と、妻の仙花さん(39)＝東京都出身＝が3月、活動の拠点を東京から山梨に移し、太神楽の魅力と山梨の文化の発信に意気込んでいる。「芸は心を前向きにする」。山梨の地で新たな一歩を踏み出す2人を訪ねた。〈戸松優〉

古里から芸の魅力発信

くるくるとジャンボよく傘の上で升を回す曲芸や、獅子舞などを披露する江戸太神楽。寄席演芸には欠かせない伝統芸能だ。「太神楽は「祝福芸」なんです」と仙三さん。江戸時代、熱田神宮の神職らが神様に代わって、獅子舞をしながら家々を回った神事が江戸太神楽のルーツという。升がよく回れば、ますます繁盛。仙花さんは「太神楽は幸せを笑顔でおすそわけしていく技」と話す。

本質に「祝福」

仙三さんは甲府市小松町の生まれ。甲府一高、国学院大を卒業後、「内向的な自身の性格を変えたい」と、第2期国立劇場太神楽研修生

として芸の世界に飛び込んだ。修業は楽ではなかった。それでも、芸の本質に「祝福があることが、仙三さんの支えになった。「生きるか死ぬか、そんな思いを抱いた人が自分の芸を見る。人生捨てたもんじゃないな、と思ってくれる人が一人でもいたら十分なんです」

研修に励む仙三さんを紹介する新聞記事を見て太神楽師となったのが仙花さん。記事の見出しには「祝福を配る若者」とあった。「自分の技で人に喜ばれる仕事をした」と思っていた仙花さんは迷わず太神楽師を志した。

舞い、曲芸、話芸、鳴り物の4つの演目を体得するには、2年もある。



鏡味仙三さん(左)と妻の仙花さん(右)。甲府市塩山



の時間がかかるという、二人三脚での修業が続く毎日。その2人にとって、東日本大震災は忘れられない経験となった。「傘の上で升を転がすよりも、看護師の仕事の方がよっぽど被災地の役に立てる」。もどかしかった当時を仙花さんは振り返る。それでも、動かすにはいらなかった。震災の10日後には東京・葛飾区の亀有駅前で曲芸を披露した。傘の上でくるくるとパンタのぬいぐるみを転がす。「不謹慎」「売名行為だ」。批判が上がった。それでも祝福芸が持つ力に希望を託した。

心を前向きに

「生きていくためには衣食住が第一。だから芸能なんてあってもなくてもいい。でも、人間って根本的には心だと思っんです。心が前向きになれば生活の糧もつくれる。沈んだ心に、スイッチをパチ

傘で升を転がす仙三さん。仙花さんは、1歳を迎えた息子の寿ちゃんも曲芸道具に興味をもつことがある。

仙三さんは、道祖神祭りなど県内の伝統文化への関心も高い。「政治、経済、文化が東京に「一極集中」してきている。長く民俗芸能に携わる方に教えを請いながら、県内の文化を発信する強いパイプをつくりたい」と意気込んでいる。

仙三さん、仙花さんはイベント出演や演芸のプロデュースなどを随時受け付けている。問い合わせは仙三さん、電話051503(333)23000。

2014年(平成26年)

3/26 水